はじめに

姜尚中

日本では、全集や叢書の類が刊行される際、次回予告や著名人のエッセイを収めた小冊子が挟み込まれていた。いわゆる「月報」だが、もはや死語に近い。今回『アジア人物史』各巻のこの附録をわざわざ新書にしたいと考えたのは、私自身が、編集委員との対話や識者の寄稿を通じて、アジア史を大きく摑み取ったような痛快さを覚えたからだ。

『アジア人物史』全12巻は、何よりもアジア・ユーラシア大陸という、恐ろしく多様で広大な大陸を舞台としている。モンスーンという共通の呼吸にシルクロードという循環する血管、仏教・イスラームという横断する精神の回廊――これらが、多様な生態系と人間集団を緩やかに、しかし確実につなぎ合わせて来た。だが同時に、峻厳な山脈は言語を分断し、砂漠は文化を孤立させ、季節風は双方向の往来を可能にしながらも時には嵐となって総てを阻んだ。統合と分断が、アジアでは自然の仕事だったのである。

アジアとは、一枚の地図に収まることを拒みながらも、それでも一枚の地図に描かれざるを得ない、巨大な矛盾の大陸である。

もし歴史が、こうした生態系や気候さらに人口や経済体制、帝国や宗教体制などの「構造」を縦糸に、交易や戦争、革命や疫病、発明や出会いなどの「出来事」を横糸とするタペストリーであるとするなら、アジアの歴史の特徴は、縦糸と横糸の単純な平織の歴史ではなく、縦糸と横糸がいわば斜めに交錯し、その交錯の角度によって多様に異なる模様が浮かび上がってくることにある。

そのグラデーションの模様を時には大胆に、時には静謐に浮かび上がらせ、それまで見えなかった何かを可視化してくれる存在こそ、生きた生身の人物にほかならない。

豪傑英雄から反逆者まで、さらに歴史の「勝者」から「敗者」まで、また名だたる人物から歴史の露のように消えていった人々まで実に夥しい数の人物を網羅した本シリーズは、光彩陸離とした人物たちの一大タペストリーをなしているのである。

アジアの歴史を、西アジアを起源に中国を経て日本に伝わった手織りの絨毯（緞通）に喩えるならば、表の華麗な模様が、裏側の無数の糸の無秩序な絡み合いによって成り立っているように、歴史の表舞台に絢爛とした事績を残した人物の歴史が、膨大な名もなき人々の上に成り立っていることを知るはずである。

以上のような歴史の縦糸と横糸の交錯に介在する人物に焦点を当てた本シリーズは、神話的な誕生の混沌から始まり、世界秩序の混沌の中で喘ぐ二一世紀の現代に至る悠久のアジアの歴

史を扱っている。その数千年にわたるアジアの歴史は、第5巻「モンゴル帝国のユーラシア統一」を分水嶺に「モンゴル帝国以前」と「モンゴル帝国以後」に分けられる。

西欧を中心とする大航海時代に先行する、「陸の大航海」とも言えるモンゴル帝国によるアジア・ユーラシアの統一は、軍事的な征服にとどまらず、文化的・経済的交流の画期的な拡大を促し、割拠的に併立していた地域帝国を全体として結び合わせることになった。この一二世紀から一四世紀に進んだアジアの統一以後、やがてモンゴル帝国の「反復」とも言えるいくつかの帝国が、儒教や仏教、イスラームなどを正統性の根拠としつつ、アーリーモダン（近世）のアジアを形成していくことになるのである。

それ以後のアジアは、「ウエスタン・インパクト」の衝撃の下、それぞれの地域の偏差を抱えつつ、模倣、反撥（はんぱつ）、拒否のグラデーションを描きながら、国家建設の苦闘の歴史を織りなしていく。その痕跡は、二一世紀の現代においても、物理学で言う「ヒステリシス」（hysteresis）――現代の状態が、現在加えられている力だけでなく、過去にたどってきた経過に依存して変化する現象――のように、歴史の糸は、過去を記憶し、歴史というタペストリーの中に織り込まれ、現在の模様の一部になっているのである。本シリーズを通じて読者は、私たちが「いま」と呼ぶものは、無数の過去の糸が積み重なった、ある瞬間の断面に過ぎないことを感得するに違いない。本書がそのための扉となってくれることを、私は願ってやまない。

I

神話世界と古代帝国

神話〜6世紀

『アジア人物史』第1巻2023年1月配本

「アジアの始まり」を多層的に読み解く

姜尚中×古井龍介

新たな歴史を生む神話や伝説の力

姜　第1巻の舞台は神話時代から六世紀までの古代アジア、歴史と神話の境目が非常に曖昧な時代です。この時代に登場するさまざまな人物を通して、後に我々がアジアとして認識する各地域に文明が起こっていく様子が描かれています。西洋史・東洋史といった分け方を一回崩していくような叙述のあり方も含め、第1巻を読むと、ユーラシア大陸の始まりに関わる歴史はこんなにも豊かな彩りを持つものだったのかと、大いに想像が広がります。分量の制約があるのは承知で、欲を言えばもっと詳しく知りたいと思う箇所もあるぐらいです。

　また、これはどの巻にも共通して言えることですが、これだけ多くの著者がいると、まるで小説のようなドラマチックな叙述の人もいれば、硬質で篤実な書き方をする人もいて、そうい

う語り口の違いもおもしろいですね。

古井　たとえば、僕が担当した第5章「アショーカ　ある帝王の生と死後生」のマウリヤ朝第三代の王アショーカ、それから宮本亮一さんが執筆された第12章「前イスラーム時代における中央アジア勢力の南アジア進出」のクシャーン朝四代目の王であるカニシュカ一世は、ともに仏教の保護者として後世に描かれています。僕の場合は、そうしたアショーカ像がいかに創造されてきたかというアプローチをとったのに対し、宮本さんは、最新の研究でカニシュカの実体としてわかっていることとわかっていないことは何かを明らかにしていくスタイルを採用しています。これは筆者それぞれの歴史に対するアプローチの違いで、実像を同時代史料からわかる限りでつかみ、それ以上は踏み込まないという抑制的な態度がある一方で、むしろ後世の史料で創造され、膨らまされた像との対照も含めて人物像を浮かび上がらせていく叙述もあるなど、第1巻の中だけでもいろいろなバリエーションが見られると思います。

姜　「神話世界と古代帝国」というタイトルにあるように、文明の担い手となった人々の人物史に先立ち、紀元前二四世紀に遡るメソポタミアの神話から始まる各地域の神話が提示される構成も大変ユニークです。神話の世界ですから、歴史、物語、文学の境は明確ではなく、ここに書かれた神話の英雄たちが実在していたかどうかはわかりません。しかし、彼らのような人々によって古代の王国の興亡があり、やがて広大な領土を支配する帝国が作られていったと

いうことは確かでしょう。神話世界を絶対的な他者としながら、それとどこかでつながっているのではないかという両義性から、科学的な実証性ではなかなか説明できない何かが醸し出されているように思います。

古井　神話は、いわばある時代を生きた人々が創造した過去ですが、その過去はただ存在するものではありません。創り出された時から別の力を持ち始めて、それが歴史をまた変えていくというように、歴史に何らかの方向性を与えるものでもあると思います。

姜　その時代に生きていた人たちが、自分たちのやっていることを神話と名付けるわけはありません。要するに、神話というものはある種の近代的所産ですから、アジアが植民地支配のくびきから脱却する時に、神話や古代の英雄たちの世界をどう解釈して自己認識し、今につなげていったのかということが重要です。

　もちろん地域によってタイムラグはあったと思いますが、アジアがヨーロッパに浸潤されていく過程で、神話世界の再発見のようなものが行われていき、それがのちにナショナリズムにまでつながっていったのではないでしょうか。たとえば日本では、一八世紀頃から後期水戸学の儒教思想の中に国学の影響が見られるようになり、そもそも日本の起源はこういうものだと押し出す動きが生まれ、近代国家建設に向かう過程で記紀神話が再定義されていきました。

古井　これは近代化の難しさでもあるのですが、本来、さまざまな地域で自分たちの起源を語

る神話があったはずです。しかし、それらが近代のメディアを通して画一的なものに統一され、押し付けられるという、非常に暴力的な側面も見られ、しばしば、近代化というものが残した課題をまざまざと実感させられます。

僕の専門である南アジアでも、近代的な歴史学が植民地化によって始まり、かつ西洋のインド学の対象として神話が分析されていった一方で、そうした非常にオリエンタリスト的な学問を、今度は植民地化された側が内在化し、それを基に自らのナショナリズムを組み立てていったという、非常に複雑な構図があります。そして、そのように組み立てられたナショナリズムは、現在に至るまで恐ろしいほどの力を発揮しています。インドでの例を挙げると、伝説の王で神の化身とされるラーマの生誕地はヒンドゥー教の聖地とされていますが、一六世紀のムガル帝国の時代にこの地に建てられたモスクを、後にヒンドゥー右翼団体が破壊しました。これは一九九二年のことで、インド各地でムスリムとヒンドゥーとの激しい衝突が起こり、多くの人が亡くなる事態となりました。

姜　神話は起源と結び付くことから、つねに流用されますが、そこに何かの意味が見出（みいだ）されると、熱に浮かされたような想像力が働いて、現代とスパークしてしまうところがありますね。

朝鮮半島には檀君（タングン）を始祖神とする神話がありますが、近年、北朝鮮は、五〇〇〇年前の檀君陵の発掘と称するものを契機にそれまでの神話否定の立場を変え、檀君朝鮮の中心は平壌（ピョンヤン）で

あると強弁しています。そんなふうに、現代と古代とが一足飛びに結び付くかのようなとんでもない話が出来上がるということ自体、きわめて近代的だと思います。第1巻は、そうした神話と現代の接点について考えをめぐらせることができるという意味でも、とても刺激的な巻ですし、現代を扱う第12巻とのある種の往還を感じます。

過去と今をつなぐ歴史の「再定義」

姜　『アジア人物史』には、時代を超えた縦のつながりと地域を超えた横のつながりがあります。古井さんが担当された第5章でも、理想の仏教王アショーカ王の伝説が、仏教の伝播（でんぱ）に伴ってアジア各地に広がっていき、やがて支配者たちのモデルとなって、日本にも伝わったと述べられています。アジアの各地域をつないでいく時に、仏教が決定的に重要な役割を果たしたことが改めて見えてきますが、そういった横のつながりが随所に出てくるのも、第1巻のおもしろさですね。

古井　古代史では人と人との横のつながりがなかなか見えにくいところがあるのですが、縦のつながりという点では、第1巻が示唆するものは大きいと思います。この巻が扱う時代は、後に古典として定義される人々の事績が残された時期でもあり、だからこそ、この巻の登場人物に対して、後世、さまざまな見方が積み上げられていくわけです。その典型が、第6章「悠久

の時を超える古代中国の思想」の主人公、孔子（こうし）でしょう。彼は死後、神格化され、その思想から展開した儒学は約二五〇〇年の間、中国のみならず東アジアに大きな影響を及ぼすことになりました。

先ほど名前が出たアショーカについても、アショーカ自身が領内に残した多くの碑文に加え、死後に作られた伝説という形でその事績が残されました。後世の人々は自分たちが生きている時代の価値観に当てはめてアショーカ像を創造し、それがまた次の時代に引き継がれて新たな像が作られていくということが繰り返されていきます。近代になると、反植民地ナショナリズムが高揚する中、インド亜大陸のほぼ全域を統一したマウリヤ朝、そしてアショーカは独立インドの理想を体現するものとして「再発見」されました。インド国旗の中央には、アショーカのダルマチャクラ（法輪）が据えられるなど、アショーカは新国家インドの象徴とされました。

このような再定義の積み重ねは、孔子やアショーカに限ったことではありません。その始まりがここに端を発すると考えれば、第1巻はきわめて多層的な構造になっていると言えるでしょう。

姜　その死後から現代に至るまで再定義され続け、巨大な影響を与えている古代の人物と言えば、他にブッダとイエスの名前が挙げられます。いずれも第1巻に登場していますが、特に第3章「ナザレのイエスと信仰のイエス・キリスト」で、アジア世界の中にイエスを位置付けた

のは、キリスト教世界にアジアからスポットを当てて相対化するという点で、非常に意義深いと思います。

古井　過去の人物について再定義をする際には、ある時、突然、別の視点から過去の人々を見つけ出してきて、そこから新たなつながりが生まれていくということも起こります。

その意味で注目したいのは、第10章「儒教王権の誕生」の主人公で、前漢と後漢の間に新（八～二三）という王朝を建てた王莽です。皇太后の外戚だった王莽は、儒学をよく学び、権力の高みに上りつめます。彼は、実際に言ったかどうかも不確かな孔子の言説を故事として「再発見」させ、新たな過去を創造することにより前漢を簒奪、自ら皇帝となり新を建国しました。王莽は、儒教を国家の統治理念の中心に置いた、中国史上初めての皇帝でしたが、その先鋭的な支配は受け入れられず、新はわずかな期間に滅亡することになります。それでも、儒教に基づく王莽の国家像は後漢以降の中国の王朝にも受け継がれていったわけです。

実のところ、王莽には、我々歴史学をやっている人間との共通点があります。歴史学者は、現在自分がいる立場から過去に対して疑問をぶつけ、その中からいわゆる歴史的事実を作り上げていくという営みを意識的にしていますが、これはまさに王莽が行ったことに他なりません。

姜　そうした歴史の作られ方について考えさせるという点も、読みどころのひとつですね。